

# ロシア中世都市における 手工業と手工業者 (I)

栗生沢 猛 夫

## 〈はじめに〉

ロシア中世社会において都市のはたした役割は小さくない。都市人口数の総人口に占める割合は高くはなかったが（それは前近代社会においては一般的な現象であった）、政治・経済・文化・宗教・軍事などの側面において都市の存在がきわめて重大なものであったことは疑いない。それにもかかわらず、従来の中世ロシア史研究は都市の果たした役割を正當に評価してきたとは言い難い。その原因は、結局のところ、ロシア中世都市が西欧のそれほどに目につく存在ではなかった、という点にあらう。ところが、この点は従来過度に強調されてきたように思われる。これまでの諸研究は、西欧中世都市とロシアのそれとの、一般的に言えば、西欧とロシアとの異質性を強調しすぎてきた。これはロシア史研究に大きな歪みをもたらしてきた。この単純化された構図のもとで、ロシア中世都市はもっぱら商業中心の、非生産的な、権力の拠点とみなされた。そしてまた基本的には農村と変らぬ性格をもつものと考えられた。<sup>(1)</sup>しかしこのような理解が誤っていることは明らかである。初期中世のロシア諸公がその都市支配を行うなかで、都市民の意向を無視しえなかったことは、数々の例によって明らかにされている。また都市が手工業生産の中心であったことも自明の

原稿受領日 1980年4月30日

- (1) ロシア中世都市研究の概略は、拙稿「ロシア中世都市をめぐる若干の問題点」『史学雑誌』88-1（1979年）を参照。わが国における研究には、商人組合をめぐるすぐれた論稿、石戸谷重郎「中世ロシア都市論」、『歴史学研究』471（1979年）がある。本稿に直接関連するものとしては、八重樫喬任「14・15世紀北東ロシアの都市手工業」、『天理大学学報』56（1967年）がある。

こととされるにいたっている。だとすれば、都市にはすでに、諸公支配（それがいかにゆるやかなものであったとしても）を甘受するだけであった農村、またもっぱら農業生産にのみ従事する農村とは、異質の何かが存在していたことになる。また、『ルースカヤ・ブラウダ』が、都市に逃げこんだホローブの捜索に便宜をはかるよう、市長官（都市代官）に命じているとすれば、（拡大本Ⅲ、第114条）それはホローブが都市を自己の隷属状態に終止符を打ってくれる（たとえそれが別の隷属状態に入ることを意味していたにせよ、従来のそれよりは良いと考えられていた）可能性を提供するものと考えていたことを示している。したがって上述の、単純化された西欧対ロシアという構図は、現実を正確に把握したものとはいえない。西欧自体、国家間、地域間に少なからぬ差異を内包することを思うとき、むしろ、ロシアを含む東欧諸国をも同一世界と認識するような視点を導入すべきであるようにみえる。

他方、問題がこの点で止まるものでないことも明らかである。ロシア中世都市の西欧のそれとの同質性は、近年ソヴェト研究者のよく説くところであるが、単なる現象上の類似点の指摘に止まる限り、それはあまり意味がない。たとえば本稿でも重要な論点の一つとなる手工業者組織をめぐる論争において、組織の有無は問題にされても、その性格についてはあまり問題とされるところがない。中世ロシアの手工業者も組織をもっていたことが重視され、それがいかなる組織で、いかなる活動をしたのかについては、史料不足を理由に明確にされぬままのことが多い。史料不足がロシアにおける手工業者組織の弱体性を物語っていると断定すること(explanatio ex silentio!)はもちろんできない。だが他方においては、いかなる組織ももたない都市手工業者など現実には考えられないがゆえに、組織の存在が指摘されただけでは意味がない。かくして、ロシアをヨーロッパの一員とする視点の導入とはロシアの独自性を明らかにする一つ的手段にすぎないのであって、とおり一遍の同質性を主張するためのものではない。ソヴェトの研究者が、ときに、ロシアの西欧との同質性を説く一方で、東方世界との同質性をも口にするのは、彼らの言うロシアと西欧の同質性が表面的なものに留まっていることを示している。西も東も、その間に横たわ

るロシアも、中世封建社会である限り同質の発展をとげたとする思想は、世界史の一般的理解に寄与するところがないわけではないとしても、実際にはあまり意味のない指摘のようにみえるからである。

さて本稿はロシア中世都市研究について以上の如き認識をもちつつ、この都市における手工業と手工業者をめぐる諸論点を整理検討しようとするものである。中世都市において手工業が重要な役割を果たしたことはあらためて指摘するまでもない。カール・マルクスとマックス・ウェーバーが驚くほどに類似の表現で、中世北西欧世界における「都市と農村の分離・対立」を説いたとすれば、それは中世北西欧都市における手工業の決定的重要性を認識してのことであつた。手工業は商業とともに都市住民の主たる生業をなしていた。農村に、また中世以前の社会（ロシアでは種族制的共同体社会）に、手工業が存在しなかったというのではない。ただ農村でも、中世以前の社会でも、それは農業から十分に分離しておらず、それゆえ専門化が十分になされていなかった。中世都市において始めて手工業が専門職として広汎に独立し、手工業者がその住民の中心的部分を占めるにいたつた。それゆえ、中世都市の何らかの意義ある分析は、手工業とその担い手の分析を除いては考えられない。問題は、以上の、従来もっぱら西欧、とくに北西欧に関し述べられて来た事柄がロシアに関しても妥当するかどうかであるが、本稿は最終的には、この点に答えることを目指している。ロシアに関しては以下の如く述べられるのが一般的であつた——キエフ期のロシア都市は商業の中心ではあつても、手工業生産の中心ではなかつた。モンゴル侵入後のロシア都市は手工業はおろか、商業の中心であることすら止めてしまった。それが活気を取りもどし始めたのは14世紀後半になつてからのことにすぎない。だがその後も都市の発展は成立途上にある農奴制の前におさえられた。かくしてロシア中世都市は手工業生産とは無縁の消費都市でしかなかった……今日ソヴェトの学界ではこのような見解は否定されるにいたっている。その大筋のところはわが国でもすでに知られている。しかし未だ問

(2) この点については、望月清司『マルクス歴史理論の研究』岩波書店、昭和48年（とくに第7章および付論）を参照。

題が十分に論じ尽されているようにはみえない。なによりも議論が具体性に欠けている。ことに、ソヴェトの研究者がロシアにおける手工業者組織に関する論争を、何らの予備的考察もなしに行っているのではなく、その技術的側面の分析にまでふみこんだ上で行っていることを想起しなければならない。本稿ではロシア中世都市とそこにおける手工業とその担い手の問題をより精密に検討することを当面の目標としている。本稿でできることは限定されているが、問題の一端を明らかにすることができれば幸いである。

## 1

研究史上、ロシア中世都市手工業にはこれまで大きな関心が払われてきたとは言い難い。諸研究者の注意は圧倒的に商業ないし対外貿易にむけられてきた。われわれはここでB・O・クリュチューフスキーやM・H・ポクロフスキー<sup>(3)</sup>の例を想起するだけで十分である。もちろん手工業研究がまったく存在しなかったわけではない。<sup>(4)</sup>すでにB・H・タチーンチェフは国家と都市の発生に際し、手工業が重要な役割を果たしたことを指摘していたし、<sup>(5)</sup>19世紀になると手工業に注目する研究者が増え始めていた。世紀半ばになると、中世ロシア都市の手工業や手工業者に関する特殊研究も公刊され始め、<sup>(6)</sup>ロシア手工業者の団

(3) クリュチューフスキーの見解は、B・O・クリュチューフスキー『ロシア史講話』1、八重樫訳、恒文社、1979年（とくに第8、第9講）を参照、彼にあっては手工業はおろか農業にも注意が払われていない。ポクロフスキーはキエフ都市に触れている箇所でも手工業についても言及しているが、ノヴゴロドに代表されるロシア都市を商業都市とみなし、西欧の手工業都市と対峙させるなど、伝統的立場を一步もでない。(M.H. Покровский, «Русская история с древнейших времен», т. I, в: «Избранные произведения в четырех книгах», кн. 1. М. 1966, стр. 197)

(4) 以下の研究史の叙述は、Б.А. Рыбаков, «Ремесло древней Руси», М. 1948, стр. 7-23 によるところが大きい。(以下本書は Рыбаков として引用する。)

(5) В.Н. Татищев, «История Российская», т. I. М.-Л. 1962, стр. 361

(6) たとえば И.Е. Забелин, О металлическом производстве в России до конца XVII в. «Записки Русского археологического общества» СПб., 1853, т. V

体組織に関する論争すら行われるにいたる。<sup>(7)</sup>「古代ロシア経済研究史上最大の出来事」と言われるH・アリストフの『古代ロシアの産業』の公刊<sup>(8)</sup>(1866年)も、決して青天の霹靂であったわけではない。これは手工業を含む諸産業に関する、年代記、諸文書、聖者伝、外国人による覚書、さらには翻訳書にいたるまでのあらゆる記述史料(10~15世紀)を、当時としてはほとんど完璧に蒐集した研究で、その意味で今日にいたるも価値を知っていないと考えられている。今日、古代・中世ロシアの都市研究にとって必要不可欠な前提として承認されている考古学研究も手がけられた。前世紀半ばにA・C・ウヴァーロフがきわめて稚拙な方法によりながらも、スーズダリ地方の7729のクルガン(高塚古墳)を発掘・調査し、その成果を明らかにして以来、今世紀初頭までに発掘された10~13世紀のクルガンは20,000にものぼるという。<sup>(9)</sup>

それにもかかわらず、これらの研究により、古代ロシアの手工業に与えられた地位は高いものではなかった。たとえば、上記アリストフは古代ロシアの金属工業に関し、「ロシア人は15世紀まで、外国産の鉄製品やロシアに滞在する外国人鍛冶工によって製造された製品を使用していた」と結論づけていた。結局のところ、彼は、史料の欠如を手工業自体の欠如とみなしたが、そのロシア産業の低水準の原因は自然条件の厳しさ——単調な自然、広大な国土と少ない人口、悪質な道路、厳しい冬、異民族との不断の闘争——にあると考えた。このような自然条件はロシア人に、頑強で、忍耐深い精神を与えたが、他方では、新たな欲求と生活条件の改善を求める心を奪いとった。またロシア人の不断の

(7) この論争は В.Н. Лешков が Очерки древних русских законов о ремесленной и заводской промышленности («Москвитянин», 1852, декабрь, кн. I) において、中世ロシアを西欧と同一視して、ロシアにおける同職組合の存在を指摘したのにたし、Н. Рычков (О цехах в России, «Русский Вестник», 1863, т. XLVIII), Н. Степанов («Сравнительно-исторический очерк организации ремесленной промышленности в России и западно-европейских государствах», Киев, 1864), И.И. Дитятин («Устройство и управление городов России» т. I, СПб., 1875) らが批判を加えたものである。

(8) Н.Я. Аристов, «Промышленность древней Руси» СПб., 1866.

(9) А.Л. Монгайт, «Археология в СССР», М. 1955, стр. 330-331.

移住・植民活動が健全な産業の発展を阻害する別の理由であったという。<sup>(10)</sup>

このような傾向に変化がみられるのは、今世紀、とくに革命後のソヴェトにおいて考古学研究が飛躍的に前進してからのことである。すなわち、今世紀の20年代になって、それまでクルガンに限定されていた考古学的発掘が、各種の居住地（селище, городище）をも対象とするようになる。このようにして、キエフをはじめとする幾多のゴロドの組織的発掘が行われ始めた。ウクライナや白ロシアでも広汎なゴロジシチェの調査が行われた。これらの発掘の結果、多数の手工業者の仕事場や工具、半製品、原料などの存在が明るみに出され、もはやロシアに手工業の存在を否定し、商業のみを過度に重視することは許されなくなった。<sup>(11)</sup>

そしてこのような発掘成果を利用した研究が多数発表され始めたが、なかでも手工業に関する再検討の気運を一挙に本格化せしめたのは、Б・А・リュバコフの『古代ロシアの手工業』であった。1942年に博士論文として提出され、6年後に出版された800頁近いこの大作で、著者は記述史料は言うまでもなく、考古学資料をも駆使して古代ロシア（9～15世紀）手工業の包括的研究を試みた。著者は、15世紀以前のロシアに本格的な手工業の存在を否定する旧説を根拠のない偏見として斥け、キエフ時代のロシアは西欧諸国に劣らぬ、高水準の手工業を誇っていたことを主張した。このキエフ時代の高い手工業発展は、バツの侵略により一時頓挫したが、その破壊的影響も14～15世紀には克服され、都市手工業は新たな発展をみるにいたる。そしてこの手工業の新たな発展こそがロシアの諸地方の経済的統合、モスクワによる単一国家の形成を可能ならしめた一因であることを著者は指摘した。戦時中から愛国心の高揚をはかってきたソ連邦において、古代（中世）ロシアにおける手工業発展が西欧のそれに劣らぬものであったことを主張する本書が、出版の翌年、いわゆるスターリン賞の対象となったのも故なきことではない。<sup>(12)</sup>

古代ロシア手工業研究はその後も続行され、各業種別の特殊研究や概説、ま

(10) Рыбаков, 13-14による。

(11) Рыбаков, 21-22

(12) リュバコフの研究業績の全貌についてはさしあたり、『История СССР』(1978, №3) および 『Вопросы Истории』 (1978, №5) 誌上に掲載された略歴紹介、さらには АН СССР, Б. А. Рыбаков, Материалы к биобиблиографии ученых СССР. Серия истории, вып. 12, М. 1978を参照のこと。

(13)

た個別都市ごとの手工業研究も数多く発表されて今日にいたっている。このよ

- (13) ここでリュバコーフ以後の中世ロシア手工業研究の主なものをあげておこう。ま  
 らリュバコーフ自身が上掲書のほかに《История культуры древней Руси.  
 Домонгольский период. I. Материальная культура》под ред. Н.Н. Во-  
 ронина, М.К. Каргера и М.А. Тихоновой, М.-Л. 1951 年第2章(手工業  
 стр. 78-181)と第8章(商業および商業路 стр. 315-369)を担当執筆し、自説  
 を要約して述べている。手工業を中心とするロシアにおける技術史の展開を知るた  
 めには、《Очерки истории техники в России с древнейших времен до  
 60-х годов XIX века》, М. 1978 が簡にして要を得ている。各時代の物質文化  
 をより詳しく論じたものとしては、《Очерки русской культуры XIII-XV ве-  
 ков》ч. I Материальная культура, под ред. А.В. Арциховского и др.  
 М. 1969 (Ремесло, стр.156-230 Б.А. Колчин の執筆; Одежда, 277-296  
 Арциховский; Оружие, 389-415 Арциховский; Военно-оборонительные  
 сооружения, 416-464 В.В. Косточкин) がある。これはモスクワ大学や科学ア  
 каデミーの歴史家・考古学者らの共同執筆になるもので、編者は本書を上掲《Ис-  
 тория культуры др. Руси》の続編と考えており、続いて16世紀編(1977年)、  
 17世紀編(1978年)が出版されている。各分野別の技術史的研究も多数発表されて  
 いる。若干の例をあげると、Б.А. Колчин, 《Черная металлургия и метал-  
 лообработка в Древней Руси (Домонгольский период)》—《Материалы  
 и исследования по археологии СССР》№. 32, 1953; А.Н. Кирпични-  
 ков, Военное дело на Руси в XIII-XV вв., Л. 1976; Б.В. Сапунов, Книга  
 в России в XI-XIII вв., Л. 1978 次に手工業の全体的位置を知るためには、《Оч-  
 ерки истории СССР. период феодализма IX-XV в двух частях》, под  
 ред. Б.Д. Грекова и др. М. 1953 および《История СССР с древнейших  
 времен до наших дней, первая серия》, под ред. Б.А. Рыбакова и др.  
 т. I, М. 1966 の該当箇所が参照されなければならない。ソヴェト期における考古  
 学研究の展開については、ロシア中世都市に関連する限りであれば、Н.Н. Вор-  
 онин, К итогам и задачам археологического изучения древнерусского  
 города, «Краткие сообщения Института истории материальной куль-  
 туры АН СССР», вып.41, 1951, стр.5-29; Н.Н. Воронин и П.А. Раппо-  
 порт, Археологическое изучение древнерусского города, «Краткие  
 сообщения Института археологии АН СССР», вып. 96, 1963. стр.3-17;  
 Монгайт, Указ. соч. (第9章古代ロシア都市, стр.344-378); «Советское  
 источниковедение Киевской Руси. Историографические очерки》под ред.  
 В.В. Мавродина и др. Л. 1979, стр.88-103 などが参考になる。以下には手  
 工業に関係するその他の主な文献をあげる。М.К. Каргер, Древний Киев, т. I.  
 М.-Л. 1958 (とくに第8章手工業 стр.369-487); Н.Л. Подвигина, «Очерки  
 социально-экономической и политической истории Новгорода Великого  
 в XII-XIII вв.》, М. 1959; М.Г. Рабинович, «Очерки этнографии русского  
 феодального города》М.1978; А.М. Сахаров, Ремесленное производ-  
 ство в городах Северо-восточной Руси XIV-XV веков, «Вопросы  
 истории», 1955, №4, стр.59-71; Он же, «Города северо-восточной Руси  
 XIV-XV веков», М. 1959; М.Н. Тихомиров, «Древнерусские города»,  
 изд. 2-е, М. 1956; Он же, Средневековая Москва в XIV-XV веках, М.  
 1957; Л.В. Черепнин, «Образование русского централизованного госу-  
 дарства в XIV-XV веках», М. 1960, (第三章ロシア中央集権国家形成の諸  
 前提: 都市商品生産・流通の発展, とくに第7節都市手工業の性格); А.Л. Шапи-  
 ро, «Проблемы социально-экономической истории Руси XIV-XVI вв.»  
 Л. 1977 (とくに第二章 工業, 市 場, 賃労働 стр. 80-157)

うななかで、リュバコフの研究は今日でも、基本文献としてその後の諸研究の基礎となっており、これにたいする言及なしには古代ロシア都市の手工業とその担い手をめぐる問題を論ずることはできない。そこで本稿では以下に、リュバコフの明らかにした諸点を検討し、あわせてその後の研究の成果を紹介する形で論を進めることにしたい。<sup>(14)</sup>

## 2

リュバコフの『古代ロシアの手工業』は、15世紀中葉までのロシアの「産業」、とくにその主要形態である手工業の、「技術、組織およびそれがロシア史の過程全体に占めた比重」(3)に関する研究である。本書は最古の時代からモンゴルの侵入（13世紀中葉）までを扱う第一部と、それ以後イヴァン三世の即位までの時期を扱う第二部とから成っている。<sup>(15)</sup>

第一部において中心を占めるのはキエフ時代の手工業であるが、ここではキエフ国家成立に先行する時代（4～8世紀）の手工業も考察の対象とされている（第1章）。それは、いわゆる「ブルジョア史学」のうちに、とくにこの時

(14) 以下の論述中の数字はリュバコフの《Ремесло》のページ数を示す。また以下にしばしば「古代ロシア」Древняя Русь, древнерусский... という表現が用いられるが、これは広義の意味でピョートル一世以前のロシア（狭義ではキエフ・ルーシ）を念頭においており、それゆえここでは中世ロシアと同意義のものと理解しておく。

(15) ここで同書の目次を記しておこう。

- 序文——問題の歴史、史料と研究の方法
- ＜第一部＞ 最古の時代から13世紀中葉まで
- 第一章 ロシア手工業の発生（4～8世紀）
- 第二章 農村手工業、9～13世紀（技術編）
- 第三章 都市手工業、9～13世紀（技術と製品の概観）
- 第四章 9～13世紀における製品の販売
- 第五章 手工業者、9～13世紀
- ＜第二部＞ 13世紀中葉から15世紀後半まで
- 第六章 タタール侵入の13世紀ロシア手工業への影響
- 第七章 農村およびヴォチナ手工業、13～15世紀
- 第八章 都市手工業
- 第九章 都市手工業者、13～15世紀
- 第十章 14～15世紀における都市手工業者の組織
- 結 論



期のスラヴ人の文化水準を低く評価しようという「ノルマン主義的見解」が根強く残っており、著者はこのような「偏見」をあらかじめ正しておく必要があると考えているからである。著者によれば、従来、東スラヴ人の文化はすべてゲルマン（ゴート）人やヴァリャーグ（ノルマン）人の創造活動に帰せられ、考古学的遺物も彼らのものと理解されてきた。そしてスラヴ人には「受動的な野蛮人」の役割しか与えられなかった。だが資料はむしろスラヴ人が古くからドニェプル川中流域において活発に行動してきたことを示している。スラヴ人は、すでにいわゆる「耕作スキタイ人」の一部として活躍しており、のちのキエフ国家も、東スラヴ人（ポリャーニン族）たるヴェネド（4～5世紀）とアント（6～8世紀）の独自の文化的伝統の上に立ってはじめて成立した。

ルィバコーフの以上の如きスラヴ人土着説は必ずしも学界で承認されている<sup>(16)</sup>とは言い難いが、彼がこれまで顧みられることのなかったキエフ時代以前の東スラヴ人の独自の社会・文化生活に分析のメスをいれようとしたことは評価しえよう。さて、ルィバコーフはキエフ国家成立以前のドニェプル川中流域における手工業発展をおおよそ次のようにとらえている。

(16) ルィバコーフのこのような立場は『手工業』第一章でもはっきりと表明されているが、その最もよい表現は、『Очерки истории СССР, III–IX вв.』М. 1958, стр. 738–878（第9章古代ロシア国家形成の諸前提）にみられる。このような立場の学説史的背景およびその問題性、現在の研究情況については、『Советская историография Киевской Руси』под ред. В.В. Мавродина и др. Л. 1978, стр. 13–35（「東スラヴ民族の起源」А.В. Гадло の執筆）を参照。Гадлоによれば、「東ヨーロッパ領域での東スラヴ民族の長期にわたる土着的発展」という観点は、今世紀20年代から50年代初頭までソヴェト学界を支配した「マル（Н.Я. Марр）の聖化された人種起源論的構図」から生れたものであり、その後の研究の進展によって、スキタイ文化とザルビンツィ文化の非連続性、ザルビンツィ文化とチェルニャホフ文化の非スラヴ性と両者の非連続性、チェルニャホフ文化とキエフ国家との非連続性などが明らかになるにつれて、その支持者を失いつつあるという。もっともこれらの点についてはいまだ一致した説が定まっていないというのが現状で、ルィバコーフはその後も自説を固持している。たとえば彼は『История СССР』т. I, (1966) стр. 339で次のように述べている。「ドニェプル中流域は何世紀もの間他のスラヴ人地域の間にあって指導的地位をしめていた。これはすでに青銅器時代に始まり、スキタイ時代にも……また紀元後最初の数世紀にも続き……9世紀におけるキエフ・ルーシ国家の形成で完成をみた。」以上の点についてはさらに、国本哲男『ロシア国家の起源』、ミネルヴァ書房、昭和51年をも参照。

- 1 この地域は青銅器時代から発展を始め、銅と錫の入手が容易でない北方森林地帯との間に差異が現われ出した。
- 2 スキタイ時代——農耕が始まり、北方との生産水準の差が本質的なものとなる。鉄鋳の採掘、鍛冶、銅の鑄造、金の型押が広く行われる。ある種の陶器が造られた。
- 3 ローマ時代（紀元5世紀まで）——ローマ文化の影響が浸透する。ドニエプル川中流兩岸に広がる「骨壺墓原文化」（いわゆるチェルニャホフ文化。リュバコフはこれをヴェネド人と結びつける）は複雑な生産方式を知っている。鉄・銅加工の他に生地彫り七宝（выемчатая эмаль, emailles champlévés）の技術、轆轤（陶車）、つやのある黒色陶器（ローマ風の特別の炉で焼かれた）が出現し、骨細工に一層の磨がかけられた。これらの分野では4～5世紀にすでに専門職人が現われていた。
- 4 アント時代（6～7世紀）——ローマ文化の影響が衰える。生地彫り七宝技術が消滅し、轆轤も用いられなくなる（9世紀まで）。<sup>(17)</sup>フン族の侵入の影響と関係があろう。手工業としての性格を維持したのは貴金属細工業、そしておそらく鍛冶業のみであった。
- 5 ハザール時代（7～9世紀初）——北方森林地帯でも農耕が発展し南北間の差縮まる。手工業の分野でもっとも重要なのは鍛冶、鑄造、製陶、骨細工、貴金属細工業等に従事する職人の聚落が形成されたことである。これらはやがて都市に発展する。南東諸族はイラン・アラブ文化に接し、その武器や装身具を模造した。9世紀には鍛冶、貴金属・鑄造、製陶、骨細工業が専門化するにいたる。<sup>(18)</sup>都市の成立とともに以後の手工業は農村と都市とで異なる展開を示す。

(17) 轆轤については、すでに8世紀に広範に普及していたとする研究者が多い。これにたいしてはИ.И. Ляпушкин, «Славяне восточной Европы накануне образования древнерусского государства, VIII-первая половина IX в.»—«МИА», №152, Л. 1968, стр.148-149 がリュバコフとともに反対している。

(18) Ляпушкин, 142-144 によると製鉄業もこの時期にはすでに農業から分離していた。

## 3

さてキエフ国家成立以前の東スラヴ人の手工業生産を以上のように概観した  
 リュバコーフは、続いてキエフ時代の検討に移る。

この時代の都市手工業に関し、著者はまずその技術的側面の検討（第3章）  
 を次の順序で行う。1 鍛冶・武器製造、2 銅・銀・金加工、3 鋳造、4 鍛造・  
 打出刻印、5 銀・金型押しおよび型抜き、6 黒金象眼、鍍金、嵌入象眼、7 針  
 金製造、線細工、<sup>フイリグラシ</sup>粒細工<sup>セルニ</sup>、8 製陶、9、エナメル、10 ガラス製造、11 その他  
 （皮革製造、仕立、製本、木材加工、骨細工、石材加工、彫刻、建築）

以上の各業種の技術的側面について触れることはここでの課題ではない。こ  
 こでは以下に、9～13世紀ロシア都市における手工業技術発展の一般的傾向を  
 記すに留めたい。

1 キエフ・ルーシ手工業発達史上最初の画期は9世紀である。<sup>(19)</sup>従来の方式に  
 加えて鉄と鋼の新たな製錬・加工法がみられ（より高性能な溶鉱炉、各種鍛  
 冶用具の出現等々）、轆轤が出現し、押抜き、刻印（пуансонная чеканка  
 <poisson>）、生地彫り黒金象眼（выемчатая чернь）、粒細工、生地彫り  
 七宝の新技法等の手法が用いられた。これらの新機軸の一部はイラン・アラ  
 ブ文化の影響下に、他はドニエプル中流域に固有の技法を基盤に生み出され  
 たものである。

2 次に注目されるのは10世紀後半、就中同世紀末である。この時期に兜と鎖  
 帷子の生産が始まった。従来これらはすべて遊牧民からの輸入品とみなされ  
 ていたものである。<sup>(20)</sup>また陶器の表面に陶工の標<sup>クレイモ</sup>印が刻みこまれるようにな  
 った（製品に標印を付した唯一の手工業者の例）。この標印は当時の製陶業

(19) Ляпушкин, 166 は、リュバコーフが10世紀の考古学資料にもとづきながら9世  
 紀についての結論を出していると批判している。

(20) たとえば, J. Kulischer, Russische Wirtschaftsgeschichte, Bd.1, Jena, 1925,  
 S.99. これにたいし、ソヴェトの研究者はロシア職人の自立性を主張する。たとえ  
 ば、キルピーチュニコフはキエフの独自の武器製造の始まりを10世紀と考えている  
 (см. Шапиро, Проблемы, 90-91)。

について多くのことを物語る貴重な資料である。<sup>(21)</sup>

この時期にはまた、平面レリーフ刻印(画像の周囲を低くする)、針金製造、線細工等の手法が行われるにいたった。世紀末には相互に関連するエナメル(仕切り *перегородка* を用いる手法)、ガラス製品(モザイク用ガラスなど)、エナメルぬりの建築用装飾陶材の生産が始まった。これらも従来はもっぱらギリシアからの輸入と考えられていたものである。9～10世紀ロシア手工業生産の中心はキエフとドニエプル中流域諸都市であった。北部ではスモレンスクで、ノヴゴロドは未だ重要性をおびていなかった。10世紀後半に出現した新技術は、諸公の居館における需要充足(居館建築から親兵の武装にいたるまでの)と関連があった。したがってこの時期の手工業の中心は官廷および種々の世襲領(貴族・修道院領)であった。自由なボサード(商人・手工業者居住区)手工業も存在したが、その役割は未だ小さかった。

3 およそ11世紀中葉から種々の分野で生産工程の短縮、若干の合理化が行われるようになる。手間のかかる打出しは母型を利用したプレス方式に取ってかわられた。生産増(「大量」生産)をはかる鋳工は、それまでの蠟の鋳型のかわりに半永久的な石版鋳型を用い始める。「大量」生産への志向と並んで、若干の分野では製品の精密な仕上げへの志向も出てくる(とくにノヴゴロドの貴金属・刻印工が有名)。この頃キエフを中心とするドニエプル川中流域では、ロシアに独自の精巧な筒型錠が大量に製造され、ボヘミアにまで輸出されるようになる(後述)。また、従来誤ってスカンジナビアからの輸入と考えられていた剣(実際にはフランク国家からの輸入)も、この頃にはロシアで生産されるようになった。

4 12世紀中葉から都市手工業は繁栄期をむかえる。ロシア諸公国の文化・技術水準は急速に高まりつつある。文化はキエフのみならず広く地方に伝播し、

(21) たとえばその分析から、陶工職の世襲性、陶工業従事者が多数で、一人あたりの生産性は低かったこと、一つの窯を複数の陶工が共同利用したことなどが分る。標印を職人のそれとみるか(リュバコフ、Тихомиров, «Древнерусские»112)、注文者ないし所有者のそれとみるか(А.Л. Монгайт, см. «Очерки истории техники» 64)については定かでない。

ますます多くの地方都市を包みこむ。クリヤズマ河畔のウラジーミル、リヤザン、ノヴゴロド、ガーリチ、ポロツクなどに進んだ手工業が展開する。小都市にすら複雑な製鉄用溶鉱炉が存在し、多くの都市において煉瓦製造、石造建築が行われる。「大量」生産への志向がより鮮明になったことが蠟製の両面鑄型や大型薄金属版型押（басменное тиснение）の出現から判断される。とくに注意されるのは、硬質の岩石から造られた模造用鑄型の出現である。これを用いることによってボサードの職人は、諸公領の貴金属細工人が高度な技術（線細工、粒細工など）を駆使して製作する装飾品を、青銅を用いて安く大量に複製することができるようになった。<sup>(22)</sup>かくて注文による生産の形態から市場むけ生産形態への移行が技術的に可能となる。若干の製品、たとえば既述の鉄製の錠などの規格品の存在が、現実市場むけ生産の行われたことを物語っている。他方もっとばら注文仕事を行う職人は、彼らの技術を模倣せんとするボサード手工業者と競うようにして名人芸的技能を発達させる。たとえば上述のロシア職人の仕切り型エナメル技術は、同時代の西欧職人のエナメル技術をはるかに上廻っており、パーデルボルンの僧侶テオフィルスをして、「ルーシはエナメルの技術と黒金象眼の多様性において」新たな発明をなしたと言わせしめるほどであった。<sup>(23)</sup>また、陶器のレリーフ像のエナメル仕上げ（пастираж < pastillage）や銅版に独特な金線画法で描かれる華麗な聖像などは、12～13世紀ロシア職人の創造的才能がこのような技法を知らなかった西欧諸国の同僚のそれをしのいでいたことを示している。

キエフ時代の都市手工業技術の発展に関するリュバコフの見解は以上の如くである。彼は上記の各分野のそれぞれについて、現存する製品や発掘された

(22) これにたいして、Каргер, «Древний Киев», т. I, 482 は、ヴォチナ手工業こそまず大規模な市場むけ生産に従事したとして、リュバコフを批判している。

(23) テオフィルスの言が本当にロシアのことを述べたものであるかどうかは問題となるところである。というのは写本によっては、「ルーシ」Rusciaではなく、「トスカナ」Tuscia となっているからである。テオフィルスの著作（『工芸目録』Schedula diversarum artium）とこの問題については、さしあたり Тихомиров, «Древнерусские» 75-78 を参照。

仕事場、工具などを綿密に分析することによって、キエフ・ルーシにおける「自前の手工業生産」の実体をはじめて明らかにした。キエフ・ルーシに見るべき手工業など存在しなかったとする従来の一般的見解を再検討する必要性を示したことに於いて、その業績ははかり知れないものがある。しかしその見解にまったく問題がないわけではない。若干の点は今後の叙述においても示されることになるが、総じて、通説批判に急なあまり論証法に強引な印象を与えるところが少なくない。何よりも史料の全般的な不足は否めない。リュバコフはこの史料不足を何とかして埋め合そうとするが、そのことが無理な論証に走らせているように思われる。史料不足という点では考古学資料の場合も同様である。近年考古学研究の発展は顕著であるが、考古学資料それ自体が慎重な扱いを必要とする上に、未だ十分に収集されているとは言い難い。だが、この点で十分な検討を行うことは本稿の著者の手にあまる。

#### 4

続いて、リュバコフは同時期の手工業生産の規模とその実体を明らかにしようと試みる（第四章）。この課題達成のために、彼が用いた方法はきわめて独創的である。すなわち彼はこの課題を手工業製品の販売様式と販売範囲とを明らかにすることにより果たそうとする。彼によれば、職人と消費者の結合様式とその規模（程度）と性格が明らかにされてはじめて、手工業発展の程度も明らかになる。しかもこの点の解明は手工業の社会的諸側面の解明にもつながり、都市と農村手工業者の区別を明らかにし、注文による生産から市場むけ生産への移行過程を理解せしむるものでもある、手工業製品の販売範囲を求める具体的方法は以下の如くである。

まず今日まで保存されている10～13世紀の手工業品のなかで、同一職人ないし同一の仕事場で生産されたものを確定する。ついで疑いもなく同一職人・仕事場で製造されたと認められる製品の発掘地を地図上に示す。（リュバコフのいわゆる картографирование による論証法）。作成された地図を点検し、非経済的な偶然的要因を除外する。たとえば手工業者の強制移住や軍事遠征の結

果ある地方へもたらされた製品の場合などである。このようにしてある製品の通常の販売範囲が得られる。

②<sup>24</sup>  
 リバコーフはこのような方法を用いながら、実際に農村手工業と都市手工業製品の販売範囲を求めようとする。まず農村手工業品についてであるが(437～452)、注目すべきは、クルガンなどから大量に発掘されている婦人用装身具、とくに耳輪である。かつてA・Aスピーツィンは、特定タイプの耳輪の分布が特定の地域(『原初年代記』のあげる古代ロシア諸種族の居住地域)と重なりあっていることを主張したが、A・B・アルツィホフスキーはヴァチチ族について、リバコーフはラジミチ族について、同様の結論に達している(439～441)。ところで問題となるのは、このような同一タイプの装身具の分布から推定される一つの閉鎖的地域(つまりある種族居住地)は、たとえばП・H・トレチャコフの言うように、一つの経済的中心から製品の供給をうける単一の経済圏であったのか、それともこの地域自体、いくつかの小地域に分れ、それぞれが中心地をもつ小経済圏の集まりであったのか、ということである。リバコーフはこれにたいし、モスクワを中心とする地域(ヴァチチ族居住地)から発掘された耳輪(7つの翼をもつ)が同一職人ないし仕事場で製作されたものかどうかをさぐることによって答えんとする。この耳輪は、先の鋭い道具で刻みを入れられた蠟版をもとに複製されたものなので、厳密に同一職人の手になるものかどうか判定しうるのである。リバコーフの分析によれば、収集された73の耳輪は15の異なる鋳型から製作され、モスクワを含む23の異なる場所に住む32人の婦人に属する。これらの耳輪は、その発掘地、つまりその分布状態から、四つの地域にまとめられうる。各地域は最大限14km, 16km, 17～

②4 このなかでとくに重要なのは、同一職人の手になる(ないしは同一仕事場からの)製品の決定方法であるが、リバコーフは、職人の署名、標印(押印)、工具(鋳型等)、製品それ自体のもつ特徴、発掘地、原料所在地等による7通りの具体的判定法を提唱している(435-437)。これにたいして Каргер «Древний Киев», т. 1, 484-6 は、これが農村手工業製品の場合には効果的であるが、都市手工業製品の場合にはあまり有効でないことを指摘している。また Колчин, «Черная металлургия», 204 もリバコーフの方法が貴金属(鋳造)製品の場合にのみ有効であることを指摘しつつ、鍛冶製品の販売範囲決定のためには適用できないことを主張している。

19kmの範囲内におさまる。各地域にはそれぞれ特殊ある耳輪が普及しており、それぞれの地域の耳輪は他地域には入りこんでいない。このことは、モスクワがこの時期（11～12世紀）には未だ近郊全域にまたがる手工業品供給地とはなっておらず、一つの小地域（17～19kmの範囲内の）の中心地でしかなかったことを示している。リュバコーフはこれを次のように表現している。「一つの仕事場で製造された製品は、種々の地点でその持主とともに埋葬されるが、その場所は最高の場合でも相互に20km以上離れることはない。もしこのように設定しうる販売範囲の幾何学的な中心に鑄造場があったと仮定するならば、ヴァチチ族の婦人たちは自分たちの鍛冶屋のところまで歩いて行くのに1時間から1時間半もあれば十分であったことになる。」（445～447）そして「すべてのヴァチチ族の婦人たちの伝統的装身具（7つの翼をもつ耳輪）にたいする需要を満たすためには、（ヴァチチ族居住地全体では）相互に20～30km<sup>25</sup>離れて散在する約150の仕事場が必要であったことになる。」（452）

以上の例は11～13世紀ロシア農村の手工業品の販売範囲が狭く、各種族居住地は経済的には未だ一つにまとまっておらず、多数の、それぞれが孤立した閉鎖的小経済圏から成っていたことを示している。このことは他の貴金属製品の例からも確認できる。またヴァチチ族以外でも、ラジミチ族およびクリヴィチ族について同様の結論が出されている。かくして一般的にこの時期の農村の一鑄工は半径約10～15kmの地域にその製品を供給していたと結論づけることができよう。

25) リュバコーフは《История культуры древней Руси》351 では、ヴァチチ族の居住領域を100,000km<sup>2</sup>と推定し、約200の鑄造所が必要であったと訂正している。彼はここでは同様に鍛冶屋の場合についても推定しており、それによれば一軒の鍛冶屋は直径10～30kmの地域の需要をまかない（平均500～700km<sup>2</sup>に一軒）、ヴァチチ族の場合200、ポロツク公国領には250、ウラジーミル・スーズダリ公国領には400以上の鍛冶屋があったという（前掲書163, 351ページ）。これにたいし Колчин, 《Черная металлургия》204 は、ナイフ、鉄、鎌、大鎌など需要の多い生産用具の場合（その生産は主に都市でなされた）、販売範囲は直径50～150kmにおよぶこと、武器、器具類（大錐、彫刻刀など）、兜、甲冑、秤などの場合はより広い範囲にわたって販売されたこと（すべての都市のボサードでこれらが製造されたわけではないから）を主張している。



都市手工業製品の場合はどうか(452~466)。ここでは農村手工業品の場合以上に分析対象となりうる製品の種類は多いのであるが、中心はやはり鑄造製品である。ことにエンコルピオン(首掛け小聖像、十字架)に関するリュバコーフの観察が注目される。彼はドニェプル中流域諸都市を中心に発掘された342のエンコルピオンを検討し、58,311回にも及ぶ相互間の比較考察を行っている。その結果、342のエンコルピオンのうち127個が32の異なる鑄型からそれぞれ複数个鑄造されたものであることが明らかになった。(他の215個はそれぞれまったく異なる鑄型から鑄造されており、考察の対象からは除外される。)多くの場合一つの鑄型から製作されたのは2~5個であるが、若干の鑄型からは8, 12, 16個の製品が作られている。さて、同一鑄型に属することが判明した個々の製品を地図上に示すと、それらの分布範囲はどのグループの場合も200 km前後であることがわかる。これは農村手工業品の場合と比較して、広がりにして10倍、面積にして100倍である。ところでこれらのエンコルピオンの分布は、①都市にのみ、しかも②キエフ公国内の都市にのみ限定されているが、都市で生産される製品で農村に、それも他公国の農村にまで広く浸透した例もないわけではない。たとえば、単一色の生地彫り七宝製の各種十字架はドニェプル中流域諸都市(クニャジャ・ゴラー、キエフなど)で製造されたが、それらはキエフ公国内のみならず、他公国の農村にまで入りこみ、その分布範囲は東西1,400km、南北1,300kmにも及んでいるという。同様のことはキエフ産の多彩色エナメル塗りの粘土(セラミック)製卵(復活祭用)やガラス製腕輪、

(26) リュバコーフは《Ремесло》29で、大きさ、模様、シルエットなどの面で相互に類似の製品から、同一鑄型により鑄造されたり、あるいは同一のプレス型から打出された製品を確定するための独自の方法を考案している。これは要するに、同一タイプの製品を一個ずつ他のすべての製品と丹念に比較していく方法であるが、この比較の回数 $x$ は製品数を $a$ とすれば、
$$x = \frac{(a-1)^2 + (a-1)}{2}$$
で表わされるといふ。

(27) Каргер, «Древний Киев», 485はキエフ産ガラス製腕輪の普及範囲がはるかに狭かったことを主張する。ノヴゴロドでも独自のガラス製腕輪の生産がなされていたこと(もっとも12世紀中葉以降のことで、それもキエフ出身の職人の影響をうけていることであるが)については、Подвижина, «Очерки...Новгорода», 58-59をみよ。

ガラス玉（金・銀でメッキされた）、筒形錠、模造用鋳型などについても言える。このことはまた、キエフ公国外の都市製品のあるものについても言える。たとえば、ウラジーミル・スーズダリ地方の農村のいくつものクルガンから同一鋳型による方形の小アイコンが多数発掘されているが（その製作地は不明）、その分布は300～400kmの範囲にわたっている。またスモレンスク付近で、厳格な規格の下に製造されたと推定される異教教的護符（11～12世紀）が広範囲（スモレンスク周辺、ラドガ湖沿岸、プスコフ地方、スーズダリ地方、ラジミチ人居住地域）にわたって普及していることも知られている。<sup>28)</sup>

一つの公国を超えて広範囲に普及している製品の存在は、11～13世紀の都市職人がすでに市場むけ生産に従事していたことを推察せしむるものである。確かに、上述のキエフ公国内都市にのみ普及したエンコルピオンなどは、特定の顧客（たとえば公国内地方都市の貴族や親兵ら）からの注文によって生産された可能性がある。だが上述のキエフ産のガラス製腕輪、生地彫り七宝製十字架、エナメル塗りの粘土製卵などは、単に諸公や貴族・親兵らからの注文ということでは説明がつかぬほど広範囲に組織的に分布している。おそらくキエフのガラス職人、エナメル職人、陶器職人は市場（しかも広範な市場）むけの生産を行っていたと考えられる。ところでこのことは当然のことながら、生産者と消費者とを結びつける仲介者＝商人の存在をも想定させる。リュバコーフはこれを「古代ロシアの僻遠の地にキエフ職人の『小間物』商品を配達して歩く、何らかの行商人」（465）と考えている。

このような行商人が各地へ運びこんだ製品、それも農村家内手工業品の代表的なものに、オヴルチのスレート製紡車がある。従来の粘土製紡車にかわって11世紀から普及しだしたこの製品は、原料（赤色ないしばら色スレート）の産地および仕事場（5ヶ所が確認されている）の所在地から、オヴルチ（年代記

28) リュバコーフが以上に述べた例は都市と農村間の交易関係の存在を示すものとしては不適當である。これらの例は、むしろ一公国を越えて広範囲に普及した手工業製品の例として理解するべきであろう。都市と農村間の経済的交流については、Колчин, «Черная металлургия» 188-194 が、都市の鍛冶製品と農村の食料品との間の活発な交換を推定している。

ではヴルチー、ヴォルニニ地方のウボルチ河畔) 付近でのみ生産されたことが判明している。その分布範囲はロシア全土にわたっているが、西部方面ではリトワ、ゼミゴラ、ロティゴラ、タヴァスティ、レディネ等の異民族との境界線で止まっており、これらの異民族居住地では発掘されていない。おそらくこの製品は異民族の言語を解しないような小行商人によって販売されたのであろう。もっとも北東方面ではロシア人以外の諸民族の居住地にも入りこんでおり、必ずしも一様には考えられない。オヴルチのスレート製紡車は上述のキエフ産のガラス製腕輪やエナメル製品などとはほとんど同じ範囲にわたって分布している。おそらくこの紡車も同じキエフの行商人によって全土に売りさばかれたのであろう。<sup>(29)</sup> この紡車は国外へも輸出されたことが知られている。輸出は次の三径路で行われた。第一はヴォルガ方面ブルガール地域へ(それは当地の鉛製紡車を圧倒した)。第二はクリミア半島ケルソネソスへ。第三はポーランドへである。ポーランドの場合、この製品は都市でのみ発掘されている。この製品はキエフ諸公がドロヒチン経由でポーランドへ輸出した品目の一つであったと考えられる。

キエフ時代のロシア手工業品のなかに、ロシア国内はもとより国外までも広く販売されたものがあったという事実は、当時のロシア手工業の発達程度とロシアの対外貿易の性格に関する従来の説に大きな修正を余儀なくさせるものである。すなわち従来のノルマン主義的見解にもかかわらず、キエフはすでに9～10世紀には西欧諸国(ルィバコーフは主にチェコやポーランドを念頭にいれてこう言っている)にたいし「積極的かつ進歩的な役割」を演じており、「奴隷<sup>チエーリヤジ</sup>、蜜酒、家畜」以外の品目をも輸出していたのである。以下ルィバコーフに従ってキエフ時代のロシア手工業品の輸出状況を概観しよう。<sup>(30)</sup>

(29) Ф.Д. Гуревич, Древние города Понеманья и южнорусские земли в конце X-XIII в. «Средневековая Русь», М. 1976, стр.25-26 は、グロドノなどのニェマン河畔諸都市(つまりロシア人居住域の最西北端)に、オヴルチの紡車やキエフ産貴金属加工用具などの発掘されることを指摘して、ルィバコーフの行商人存在説を確認している。

(30) これについては、さらに「Ист. культуры др. Руси», 第八章(315-369)を参照。

対ビザンツ貿易においてはロシアは、言うまでもなく圧倒的に入超の状態にあった。だがケルソネソスなどの属州都市では、スレート製紡車、青銅製エンコルピオン、スレート製小アイコンなどのロシア製品が発掘され、帝都コンスタンチノーブルにおいてもロシア製の骨細工は珍重されていた。また「ギリシアからヴァリャーグへの道」の終着点スウェーデンにおいては、ロシアからのエナメル塗り卵、生地彫り七宝製十字架などが数多く見出されるという。かつてスウェーデンの研究者T・アルネが「東方からの製品」とよんだものの多くもロシア製品である可能性があるとしバコフは推察している。西スラヴ地域（ボヘミア、モラヴィア、ポーランド、沿バルト地方）へのロシア製品の輸出について記すと、キエフから西方に通ずる交通路はおよそ次の二つであった。第一はキエフとポーランド、ボヘミア、モラヴィア、南ドイツなど中欧とを結ぶ道であり、第二はキエフを起点にノヴゴロドやポロツクを経てスカンジナビア、バルト海沿岸さらに北西欧へと至る道である。第一の陸路沿いの諸都市——ドロヒチン（ブク河畔）、クラクフ、ブルノ、ヴラチスラヴァ（プレスブルク）、プラハ、ベシュト、ヴィーンなど——には、ロシア商人が姿をみせ、さらに遠くパッサウ、レーゲンスブルクとの間にも交易が行われた。レーゲンスブルクには *рязари* と呼ばれる一団の商人がいたが、これはルーシとの交易に従事する商人団であった可能性<sup>(31)</sup>がある。ロシア手工業品の輸出という点で注目されるのはボヘミアである。ここではある種の貴金属細工品が発掘されているが、これは当地で製造されたものでも、西欧諸国で製造されたものでもなく、キエフ職人の製品を模倣したものであるという。また14世紀のボヘミアには俗語で「ルーシ錠」と名づけられた鉄製の吊り錠が存在したが、これはキエフ型筒形錠のことであったと考えられている。キエフ・ロシアとポーランドとの関係について言えば、ここでは「疑いもなく」ロシア商人が積極的であった。ルーシ領内にポーランド製品がほとんど見出されないのにたいし、たとえば上述のオヴルチ産紡車は11～12世紀ポーランドのヴィスワ川とヴァルタ川間の全

(31) これについては В. Васильевский, Древняя торговля Киева с Регенсбургом, в: «Журнал Министерства народного Просвещения» (以下 ЖМНП と略記), 1888, июль, стр.121-150 を参照。

都市において発掘されるという。またカリシュではキエフ産の三玉の耳輪が、クラクフではキエフ・チェルニゴフ型の黒金象眼をほどこされた銀製の婦人帽飾りが発掘されている。

第二の交易路で注目されるのは、沿バルト海スラヴ人地域である。従来この方面における交易はすべてノルマン人やゴートランド人、さらにはハンザ商人の手になるものと主張されていた。だがルィバコーフによれば、これは誤りでむしろハンザ進出以前の9～11世紀において、この地方とビザンツやイスラム圏とを結びつけたのは、もっぱらロシア商人であった。彼らこそが言語的近似性を利用してこの地域に東方からの物資をもたらした。この地域で発掘された銀製品は、ロシアの線細工、粒細工、打出刻印等の技術的特徴を示している。

## 5

以上の如く手工業製品の販売範囲を求めることによって、キエフ・ロシアにおける手工業の高度の発展を結論づけたルィバコーフの次の課題は、この時代の手工業者の社会的状況を明らかにすることである。中世ロシアにおける手工業者 (ремесленник, художник, хитрец, もっとも一般的には мастер<sup>(32)</sup>) をめぐる問題の一つに、いかなる種類の都市手工業職が存在したか (専門化の問題) がある。この点に関し、記述史料は、11～13世紀都市手工業職として全部で22種類しかあげておらず、断片的である。そこでルィバコーフは考古学資料によりながら、10の都市について64種類 (実際にはそれ以上) の手工業職の存在を確認している。これらは生産方式によって次の11のグループにまとめられる。1 金属 (鉄) 工, 鍛冶工, 各種武器製造人, 2 非鉄・貴金属加工, 3 木材加工, 4 石造加工・建築, 5 皮革業, 6 織物業, 7 陶磁器製造業, 8 ガラス・エナメル製造業, 9 骨・石材細工, 10 製本 (写本, 翻訳) 業, 11 その他 (蠟,

(32) Тихомиров, «Древнерусские», 141 は、手工業者が一般的には людье, чад, простая чад (「人々」, 「庶民」) とよばれ, 他の住民と区別されることが少なかったことを指摘している。(だが彼はこれを必ずしも手工業(者)の比重が低かったことの表れとは解してはいない。)

油、バター製造等)。各グループはそれぞれさらに製作される製品の種類によって細分される。以上には料理人、パン焼職人、各種の食品製造業者、馭者、筏の船頭、旅芸人、グトク奏者、グースリ奏者、建築職人、医者などは含まれていない。それゆえルィバコーフの分類法にはいくつかの改善すべき点がある<sup>(33)</sup>。今後それは種類がふえる方向で改善されて行くであろう。64種類を数えあげられた都市手工業は、同時代の農村に、わずかに鍛冶工、陶工、鑄工(貴金属細工人)、桶屋、靴屋、彫石工などしか見出されなかった(しかも多少なりとも専門化していたのは鍛冶工のみであった)のと比較して、驚くべきほどに多様である。と同時に、キエフ・ロシアの手工業を無視してきた従来の研究者はこの事実だけからでも、自らの見解を再検討しなければなるまい。

手工業者が都市人口のどの程度の割合を占めていたかに関しては情報は無い。ルィバコーフも特にこの点に関心を払ってはいない。ただ、彼はこれまでの「発掘によって明るみに出されたほとんどすべての都市住宅が、手工業者の住宅兼仕事場であった」<sup>(34)</sup>(205, 510)ことを指摘している。

都市手工業者がどの程度農耕に従事していたかは不明である。手工業者の住

(33) ルィバコーフ自身この点については一定していない。彼は《История культуры др. Руси》, 166 では42種類とする一方、《История СССР》 т. 1, 536 では100種類以上としている。これにたいしТихомиров, «Древнерусские», 70~71 はルィバコーフの分類法を批判しつつ、自らはもっぱら記述史料の分析に基づいて34種類の職種を列挙している。また Колчин, «Черная металлургия», 194 сл. は鍛冶(黒色金属加工)業だけでも16種を数えあげている(ルィバコーフは9種)。ついでながら, Н.Д. Чечулин は16世紀諸都市に210の手工業職を数え(《Города Московского государства в XVI в.》 СПб. 1889=Slavistic Printings and Reprintings, 198. The Hague/Paris, 1969, стр. 339-342), А.В. Арциховский は16世紀ノヴゴロドに237ないし239の手工業職を数えている(см. Колчин, «Черная металлургия», 200 и др.)。

(34) Каргер. «Древний Киев», 370 は同様のことをキエフについて指摘している。また Подвигина, «Очерки...Новгорода», 50 は、ノヴゴロドの住民の大多数(多量性)が手工業に従事していたと述べている。これにたいして Чечулин, «Города», 338-339 は16世紀に関し、手工業人口を全都市人口の平均20~25%と推定している。ただこの点について一言すると、最近の考古学研究において、手工業がいわゆるボサードにおいてのみならず、諸公のクレムリ(ジェチーネツ)、貴族や修道院の都市内居館ないし領地などにおいても広範に営まれていたことが確かめられており、従来のように手工業者の割合を過少に評価することはできなくなっている。

宅兼仕事場でしばしば挽臼が発掘されているが、これを根拠に農耕の存在を結論づけるわけには行かない。都市市場では、穀粉が保存しにくいという理由で穀物が製粉されずに売られていたからである。菜園や家畜の存在は一般的であった。<sup>(35)</sup>

自らの仕事場をもたぬ手工業者もいた。たとえば仕立職や大工である。後者はアルテリを組織し、契約により種々の建築に従事していたことが知られている。大石造建築工事などの場合、しばしば現場に一連の手工業者の仮宿が建てられた。だがロシアでは西欧におけるのと同様の遍歴職人は存在しなかったようにみえる。

都市工業者が自ら店舗を構えて販売活動を行った可能性は十分にある。だが16～17世紀には一般的であった市場 *торг* における手工業者の店舗街 *ряд* がこの時代にすでにみられたかどうか史料は何も語らない。

手工業生産の一般的形態は注文生産であった。通例、注文者が職人の仕事場を訪れ、「契約を結び」、価格、引渡し時期、時には材料についても取決めがなされた。貴金属加工などにおいては注文者自らが原料を準備した。手工業者に原料を与え、納入された完成品を販売する類の注文者がいたかどうかは不明である。若干の場合には手工業者があらかじめ半完成品を作って注文を待ちうけることもあった。また手工業者の一部がその製品の販売を行商人に委ねていたことはすでに記した。キエフやノヴゴロドでたびたび蜂起した市民は、おそらくこうした市場と結びついた小商品生産者で、買占め商人、修道院、貴族などの高利貸の重圧に苦しんでいたと考えられる。

手工業者の賃銀に関しても史料は少いが、若干の情報が残されている。『ルースカヤ・プラウダ』によれば、4頭の馬を使用する城砦建築職人は1日1クーナの貨幣と食糧（パン、黍、麦芽、燕麦）を得た。<sup>ゴロドニク</sup>1クーナで彼は肉、魚、飲料を手に入れることができた。以上の、いわば最低生活費のほかに、彼は出

(35) ロシア封建都市における農業（穀作、畜産、園芸、野菜栽培その他）の位置については、さしあたり М.Г. Рабинович, О земледелии в русском феодальном городе, «Древняя Русь и Славяне», М. 1978, стр. 129-132 および Рабинович, «Очерки этнографии», 53-66 を参照。

来高払いによる支給をもうけた。城壁一区切(11世紀ヴィンゴロドの場合、 $4 \times 2$  mを丸太材でおおう)の基礎工事にたいし1クーナ、その完成時に1ノガータであった(1クーナは銀約1g、1ノガータは約2.5gに相当)。当時1頭の去勢した牛ないし1頭の若い雄馬の値が50クーナ(20ノガータ)であった。<sup>(36)</sup>モストニク橋梁職人(木材舗装人夫)の場合、現物は燕麦のみで、あとは仕事量に応じて10ロコチ(約5m)1ノガータの割で貨幣をうけとった(拡大本Ⅲ、第96条、97条)。<sup>(36)</sup>ヤロスラフ公のキエフ・ゲオルギー教会建立の際、一般労務者が1日1ノガータを得た話が伝わっているが、これは公の特別の大盤振舞いのように思われる。<sup>(37)</sup>イコン画家、貴金属細工師、大理石彫刻師などははるかに恵まれた状況にあった。ベチェールスキー修道院教父伝によれば、一枚の大理石版にたいし3グリヴナ(591g)の銀が支払われた。そのほか金・銀・真珠などをちりばめた十字架を製作して40グリヴナを得た職人、「金貨や銀貨をたつぷり」受けとったと非難されたベチェールスキー院のイコン画家アリンビイの例などが知られている(511~512)。<sup>(38)</sup>

手工業者一般の法的地位は、『ルースカヤ・ブラウダ』の手工業者殺人にたいする人命金規定から類推することができる。それは公領の手工業者の殺人にたいしては12グリヴナを定めている(拡大本Ⅰ第15条)。この額は公領役人ないし耕作監督の場合(同13条)と同額、スメルド、ホローブ、リャドヴォチラ<sup>チウ</sup>隷属民の場合(5グリヴナ同14、16条)の二倍以上となっている。手工業者が<sup>(39)</sup>

(36) なお『ルースカヤ・ブラウダ』簡素本Ⅱ第43条にも、より早い時期の *мостник* の賃銀についての条項がある。см. «Правда Русская», I. Тексты. под ред. Б. Д. Грекова, М.-Л. 1940, стр. 73, 114-115『ブラウダ』の邦訳はすでに河村盛一、勝田吉太郎両氏によって試みられている(河村盛一「ルースカヤ・ブラウダ」、『史林』34-3、『神戸外大論叢』2-2, 3-2; 勝田吉太郎「ルス法典研究」、『法学論叢』59-2)、がグレコフ監修下の上記テキストを底にした訳はいまだ現れていない。

(37) см. Каргер. «Древний Киев», 486-7

(38) これについては中村喜和編訳『ロシア中世物語集』筑摩書房、1970年、90-101ページをみよ。

(39) なお『ルースカヤ・ブラウダ』拡大本第3条によれば、一般自由人殺害の場合の人命金は40グリヴナである。«Правда Русская», I, стр. 104



諸公にとって貴重な存在であったことが伺える。

一仕事場ないしアルテリ（仕事仲間、組合）内の生産組織についてみると、大工のアルテリが独自の長老をもっていたことが知られている。長老はアルテリ全体の業務を司どり、それを法的に代表した。仕事の条件について各員は彼と交渉しなければならなかった。他に窯を共有する陶工のアルテリも知られている。若干の職種では何らかの仕事場内分業がみられた。親方を補助する何らかの助手のいたことはアイコン画家の場合（上記アリンピイの例）などから知られている。西欧風の「職人」が存在したかどうかは不明である。ガーリチ公ダニールによるホルムの城砦建築の記事（『イパチェフスカヤ年代記』1259年の項）にみえる「若衆」унотыをそれとみなしうるかもしれない。いずれにせよ、この時代の複雑な手工業技術から、ロシアにも長期の見習い期間とそれを修了してはじめて、親方となりうるような制度が存在したことは十分に予想される。徒弟・職人・親方を峻別するような階層制がもっとも早く出現しえたとすれば、それは複雑な技巧を求められた貴金属細工業においてであった<sup>(40)</sup>。ルィバコーフはこれとの関係で、ノヴゴロドで発掘された二個の類似

(40) ロシアにも徒弟制度 ученичество の存在したことが多くの研究者によって主張されている。たとえば Тихомиров, «Древнерусские», 110-111; Колчин, «Черная металлургия» 201-202; «Очерки истории СССР. IX-XV вв.» 1, 142 (Рабинович) など。その際この制度の存在に直接言及している論拠としてあげられるのはおよそ以下の諸点である。①上記アリンピイが「聖像の描き方を学ぶために на учение иконного писания, 両親によって修道院にあづけられた」（『ロシア中世物語集』91ページ）と記されていること（11世紀末～12世紀初）、②ヨハネス・ダマスカスの『神学』のスラヴ訳（12世紀）に、「靴屋は弟子 ученик に、いかに小刀を扱い、皮を断ち、коюга (?) を用いて靴を縫いあげるかを教える」（И.И. Срезневский, «Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам», СПб. 1893, т. III, стр. 262）と記されている点、③12世紀の家庭訓《Златоструй》中の一節、「しばしば手工業者は弟子 ученик に飲み食いをするな」と非難されている」（Срезневский, «Материалы» т. III, стр. 119）、④既述の『イパチェフスカヤ年代記』1259年の項にみえる уноты「若衆」（Полное собрание русских летописей, т. II. Ипатьевская летопись, СПб. 1908—М. 1962, стр. 843）を、むしろ徒弟と理解する研究者もいる（コルチン）。⑤『プスコフ裁判文書』（14世紀末～15世紀初）第102条の次の一節の「もし職人 мастер が徒弟 ученики にたいし教授料を要求し、徒弟が拒絶した場合、自ら教授料のことで宣誓をするも、徒弟に宣誓を命ずるのも、主人の自由である」（«Памятники русского права» т. II, М. 1953, стр. 299）チホミーロフらはこれを、徒弟制度の最初の法制化とみている。）さて、以上の中世初期ロシアの徒弟制度をめぐるのは、史料をどう解釈するかなど問題が多いのにたいし、中世後期（16世紀、就中17世紀）に関しては事情は相当明らかにされている。これについては後編を参照。

の銀製容器を親方試験のためのロシア版 *chef d'oeuvre* ないし *Meisterstück* と考えている (294~299)。

さて、もし12~13世紀ロシア手工業者に以上の如き階層制が存在し、親方試験制度もみられたとするならば、このような制度を管轄する同職組合組織の存在も前提されてこよう。確かにC・B・ユシュコフが指摘する如く、「同職組合組織に関し、9~12世紀の史料は沈黙している。」だが彼自身続けて述べる如く、「このことはわが国にそれがなかったことを意味するものではない。その存在は十分に可能である。」<sup>(41)</sup> ルィバコーフもこのユシュコフの見解に賛成している。

ルィバコーフをしてこのような結論に至らしめたのは、これまでみてきた如きキエフ手工業の高度の発展である。だが他にもいくのかの要因がある。一つは商人組織の形成と発展である。ノヴゴロドでは「イヴァン百人組」とよばれる<sup>(42)</sup> 蠟商人組合が12世紀前半に特許状を得て存在していたし、そのわずか後には第二の商人組合(聖ピャトニツァ教会を拠点とする「海外商人」*заморские купцы* の団体)の存在も報じられている。西欧諸都市で手工業者団体が商人団体とはば時を同じくして出現しているとすれば、ロシアでも同様に考えることができるのではないか、というのがルィバコーフの見解である。他に考えられることは、ロシア都市手工業者の蜂起等にみられる彼らの政治的発言力の強化である。キエフ諸都市では手工業者を含む市民が武装していたことも重要であろう。またこの頃から都市に特有な「異端」も姿をみせてくる。禁書を読み、「奴隷」や「手工業者」*рукодельные* と会談した廉で僧院を追われ、異端と断じられたスモレンスクのアヴラーミはワルド派の教義を知っていたと言われる。ルィバコーフにとって「ロシア手工業者らの都市の歴史はその一般的な

(41) С.В. Юшков, «Очерки по истории феодализма в Киевской Руси, М., 1939. (The Hague/Paris 1969) стр. 140

(42) これについては石戸谷前掲論文参照。ただし「イヴァン百人組」が真に12世紀から存在していたのかどうかについてはより吟味されるべきである。

特徴において西方の先進的諸都市の歴史と一致している」のである。<sup>(43)</sup>

ところで彼は、このロシア都市と西欧諸都市との類似性を具体的には次の諸点（これらの点についてリュバコフが十分に立証しえているかどうかは大いに問題となるところであるが）に求めている（517～518）。1 手工業者が都市人口の過半数を占めること、2 多様な手工業職の存在、3 市場、ときには買占め商人との関係の漸次的拡大、4 親方と職人の存在、5 親方試験制度の存在の可能性、6 手工業者の都市軍への参加、7 都市下層民の高利貸への従属と後者にたいする反乱、8 階級闘争の特殊形態としての異端の存在、9 手工業者の都市行政への部分的参与、10 法的形式を有す手工業者団体の存在が予想しうること、以上である。

リュバコフのキエフ時代の手工業に関する考察は以上で終る。ロシアの手工業は以上の如き経過をたどって12世紀末から13世紀初頭にかけて最高の水準に達した。一般に主張されている12世紀後半における手工業の衰退は事実<sup>(44)</sup>に反する。キエフにおいても他の地域においても衰退は起らなかった。「ロシア手工業の前には、同時代のイタリア諸都市の手工業の前におけると同様の、さらなる発展の広い道が開かれていた。モンゴルの侵略者たちがこの開花せる文化を、その絶頂点において踏みにじり、横取りしてしまった。」（522）

(43) ロシア中世都市手工業者組合をめぐる問題については続稿で詳しくふれるつもりであるが、ソヴェトの研究者の多くはリュバコフの如き論証法に賛成している。たとえば Тихомиров, «Древнерусские», 128 は、史料が手工業者組織について沈黙していることを認めながらも、「理論的にはその存在を想定すべき」ことを説いている。また Рабинович, «Очерки этнографии», 36 は、「われわれは、13世紀以前のロシア都市における西欧の同職組合と類似の手工業者組織の存在を、論証ずみのことと考えている。М. Н. Чехоміроф, Б. А. Лубакофらの提起した論拠は十分に説得的なものである」と述べている。

(44) リュバコフによれば、1169年のアンドレイ・ボゴリュブスキー公のキエフ攻略は、キエフ公領をはじめとするヴォチナ手工業にとっては大打撃であったが、キエフ都市手工業全体にとっては何ら本質的障害となるものではなかった（498-9）。